

一 問一 ① 勤 ② 臨 ③ 映 ④ 神経 ⑤ 資質

問二 a イ b ウ c エ

問三 美しい夕焼けを見ても、夕焼けだなと一瞬思うだけで、たとえ刻々と色が変わる空を眺めて驚き感動しても、太陽が水平線へと没してしまえば夕焼けは終わりだと思いこんでいた。

問四 我々の日常生活

問五 日常的な感覚や意識、あるいは言語ではとらえ、表現することが容易ではない、未知で、豊かで、新たな美や世界を人間に経験させてくれるものだ。それは、真に詩人と呼ばれる人が、その「言語を超えた世界」を言語によって表現し、「詩」という形にすることでわたしたちのもとへもたらしてくれる。

二 問一 現実にはありえないが、感じとったこと、空想を含めて想像したことをそのまま言葉に表したものだ。

問二 今年の夏休み、休みをとって沖縄から帰ってくるというおじさんと会うのを楽しみに、少女は夏休みのほとんどを図書館に通い、沖縄の自然や日常生活を調べることに費やしていた。突然、都合が悪くなったという知らせに娘が落胆しているだろうと思いやって、あえて自分の兄を非難することで、娘の気持ちを少しでもなぐさめたいと思っている。

問三 父親はもともと果物が苦手だったので、食べたいという気持ちはわかかなかったが、手をつけないのも悪いと思い、少し食べてみた。なんともたえようのない味で、食べつづける気持ちがなくなった。美味しそうに食べている娘なら食べてくれるだろうと思い、皿を娘の方へ押しやった。

問四 上側にも下側にも毛立ちがある扁平な楕円形の種を眺め、奇妙で不思議な思いを抱いた。その姿形は、高さ一〇メートルもあって、厚い葉をつけるマンゴーの美味しい果肉の中心にある種というイメージを結ばず、改めて不思議な思いを確かめている。

問五 乾いたマンゴーの種を見て、少女は感じたままに「木になった魚」を想像し、そのまま言葉にした。一方で少女は自分に見えても人には見えないものがあるのではないかと、自分が間違っているかどうかを決めるものは何なのか、という迷いや疑問を抱いていた。「わたしは木になった魚を見た」とみんなに言いたいと思ったが、疑われたり、うそつき呼ばわりされて、自分の思いや言葉がだれからも理解されないことになるのはいやだった。

解 説

一 出典は、吉村萬壺「生きていくうえで、かけがえのないこと」。

問二 a 「何かでこの世と繋がっておかなければやばい」という地点を踏み越えていく「勇気のある営み」ですから、イ「雄々しく」。

b 詩人は「あちら側」と「こちら側」を「往還」します。詩作というものがこうした往還によってなりたっているのなら、ウ「自由に」行き来できなくてはなりません。

c 「豊饒で未知なる世界から」「宝を持ち帰って」世界を彩るのですから、エ「豊かに」が適当でしょう。イ「明るく」も良さそうですが、エ「豊かに」はより広い範囲をカバーします。

問三 「私は心から堪能し『見た』と思って腰を上げようとした」という一文に注目します。『見た』と思って」すなわち「頭の中の思い込み」であって、よって直前の段落の内容をまとめて解答を作ります。

問四 「向こう側の世界」とは、「こちら側の世界に戻れなくなるな」るかもしれない「言語を超えた」「豊穡で未知なる世界」です。その反対ですから、言語によって言い表せる、既知の世界、すなわち「我々の日常世界」（文章上段の末尾の行）です。

問五 この文章が最後に詩論、文学論に展開されていくことに気がついたでしょうか。詩とは、散文で捉えきれない新たな美や世界をとらえるところに眼目があるのです。逆に言えば、詩や韻文でしか捉えられないものがこの世界には確かにある、ということです。作者はその「なじみのない異形のもの」「こちら側にはない過剰なもの」に満ちた「言語を超えた世界」に、「行ったきり戻れなくな」る危険もかえりみず飛び込んでいき「こちら側の世界にはない宝（＝宝石のような言葉）を持ち帰る（＝詩作をなす）」詩人たちに畏怖と尊敬を覚え、その「冒険」に「魅了され」る「芸術家」としての自分を確かに感じながらも、自分の「散文家」としての資質を自覚した上で「向こう側に行くのは文字通り死の時と思い定めている」のです。

二 出典は、竹西寛子「木になった魚」。

問一 「豚の卵」「馬の角」といったものは現実にはあり得ないものです。伯父はそうした珍奇さを想像し、また好んでもいたのでしょう。ちなみに、現在の山梨県南アルプス市の十日市場では、「売っていないのは猫の卵と馬の角」（＝現実にはあり得るものは何でも売っている）と称されていたとのこと。

問二 大好きな伯父さんが「沖縄から休みをとって帰ってくるというので」、「少女は、友達の誘いも断ったし、うちに誘うことも」せず、「学校の図書館だけでなく、住んでいる町の図書館にも」「真夏日の連続にもくじけず」夏休みじゅう通いつめました。それなのに「急な都合で」伯父が来られなくなったとあっては、少女が落胆することは必至です。そんな娘のために母親は「聞こえよがしに」伯父（母親の兄です）の悪口を言ってやることで、娘の落胆を少しでもやわらげてやろうと思ったのです。

問三 「少女の父親はいったいに果物の類を好まず、妻や娘にはすすめるものの、自分ときたら和菓子一辺倒であった」とあります。父親はそもそも果物が好きではないのですが、義兄がわざわざ沖縄から送ってきたものに口をつけないのも悪いと思って「二口三口」口を付けましたが、少女が「薔薇の花のエキスとアイスクリームが口の中で溶け合っているような」と評したマンゴー（この物語の時代ではまだ珍しいものでした）の芳香と甘みは、やはり父親の口には合いませんでした。ところが娘（と妻）は実に美味しそうに食べています。そこで、娘に譲ってやることにしたのです。

問四 「高さは一〇メートルもあって、厚い葉をつけ」「濃い紅に熟れ」た「強い香り」を放つ、いかにも南国的なマンゴーと、「白髪を逆立てたような毛立ち」があり乾くと一層まるで動物の骨のような見た目の種とでは、どうにも連想が結びつかず、母親は不思議な気分になったのです。そして、こうした驚きが、ものに対する新たなイメージ、新たな見方を手に入れる糸口になるのです。

問五 二百字記述です。マンゴーの種が「海のお魚が木になっている」ようだという発見がみんなに理解されないと悲しい…こうした解答では桜蔭が求める水準とは言えません。それならば問題文は（中略）以降だけで充分なのです。なぜ（中略）以前が問題文とされているのか？ それは大問一・二を通じて、「見る」というテーマが今回の試験で扱われているからです。「見る、見えるということに関して、少女には日頃から迷いがあった。たとえ自分に見えても人に見えないものは、見たことにはならないのか。もし自分が間違っているのなら、間違いとそうではないという見分けはどこでどうつけられるのか」。文章の末尾の、“なぜ自分は自分であって他の何者かではないのか？”という哲学的問いにも通じる、この「見る」ことについての少女の疑問が、文章全体の主調低音になっていることに気がつけるかどうかは解答のカギとなります。母親と一瞬理解が通じ合ったかに見えた「木になった魚」は、しかし結局自分だけの認識で友達のだれからも理解されないだろう、そうなってはつらく、孤独である——緑色の男の子とお互いが「見た」ものを共有したいと思いながら、それが不可能であると悟っている少女の姿です。